

有田焼の歴史

なぜ有田の町で磁器が発展したか

16 世紀後半、太閤（たいこう）（引退した関白）・豊臣秀吉（とよとみひでよし）（1537～1598）が、朝鮮半島経由で中国・明（みん）朝の征服に乗り出した。それが失敗に終わり撤退する際に、肥前地方（現在の佐賀県と長崎県）の大名や武将たちは、朝鮮半島の職人を連れて帰ってきた。侵略に失敗する以前から、肥前国沿岸の町・唐津の大名は、唐津焼（からつやき）という無孔質の炝器の一種を作るために挑戦の陶工たちを連れ帰っていた。唐津焼は九州最古の施釉陶磁器である。1590 年代までに、多くの朝鮮人陶工たちは自らの窯を持ち始め、唐津の南にある有田を含む肥前国一帯で唐津焼を生産していた。

1610 年代、有田地域で磁石（じせき）が発見された。「陶石」は、シリカ、石英、カオリンを多く含んだ雲母質または長石質の石全般のことを指す。陶石は、硬質磁器の制作に必要な種類の土を作るために使われる。その硬質磁器の焼成には大量の木も必要になった。陶石が発見され、山からの木材の供給も潤沢だった有田の町は、日本で最初の磁器生産の中心地となった。

佐賀藩の大名は磁器生産に秘めたる可能性があることに気づいた。江戸（えど）時代（1603～1867）を通して、佐賀藩は有田で新しい磁器窯を管理・保護することを目的に、資源と人材を投入した。初期の有田焼（ありたやき）は、白磁にコバルト系の絵の具で絵付をしてくから透明釉をかけるといふ、青と白の染付（そめつけ）技術が特徴である。1640 年代には、地元の陶工たちが中国の上絵技術を学び、日本で初めてとなる釉上彩（上絵（うわえ）または赤絵（あかえ）と呼ばれる）の色絵磁器が登場した。

江戸時代は日本の大半の場所で海外との交易が禁じられていたが、オランダ東インド会社は、同じく肥前国の一部であった長崎港で貿易所を運営することを認められていた。17 世紀初期、日本や西洋で最も人気のあった磁器は中国産のものであった（一部の英語圏の国では、現在でも磁器のことを「china」と呼ぶことも多い）。その後、明朝から清（しん）朝へと移行する際に発生した内乱（1618～1683）の最中の 1644 年頃には、中国産磁器の輸出が止まってしまったため、オランダの貿易業者は日本産磁器の購入へと切り替えた。この新たな需要に対応するべく、有田の山間部には窯がさらに作られた。これらの窯や周辺の窯で生産された磁器は伊万里（いまり）港から全国へと運ばれたため、これを受けて、この磁器は伊万里焼と呼ばれるようになった。ただ現在は、単に伊万里から運ばれたものではなく、伊万里で作られた陶磁器が伊万里焼と呼ばれ、17～19 世紀後期に有田で作られた磁器は古伊万里（こいまり）と呼ばれることが多い。

泉山の発見

1610 年代、有田の陶磁器生産は町の西部、朝鮮人陶工の一団、特に中国風の青と白のデザインの磁器制作に特化したグループが中心となった。しかし、陶石の入手が困難であったため、数少ない磁器が多く石器と並んで同じ窯で焼かれていた。

1616 年、金ヶ江三兵衛（かながえさんべえ）（1655 年没）という名の朝鮮人陶工が、他の陶

工たちと共に有田西部に移り住んできた。三兵衛は、有田東部にある泉山（いずみやま）で磁石の鉱床を発見し、その近くに新たな窯を作ったと言われている。泉山磁石場で採れる磁石は、磁器を作るのに必要なカオリナイトが多く含まれていたうえ、大量に採掘することができた。

1637 年、佐賀藩は有田の磁器生産を泉山に近い町東部に集中させた。窯は山の近くにある谷の急峻な場所に作られ、川の水を使って木製のトリップハンマーを動かし、磁石を砕いて粉にした。この砕いた粉を水と混ぜて磁土が作られた。泉山の近くにある窯では磁器だけが生産された。泉山磁石場は 1980 年に国の史跡に指定され、1990 年代まで一般的に使われた。

盛況な輸出

17 世紀後半、磁器の輸出が増えたことで、有田の磁器生産も急増した。その頃、中国磁器はほとんど姿を消してしまっており、欧州市場の需要に応える新しい商品が必要とされた。その中には、コーヒポットやワインのデキャンタ、ビールジョッキ、塩入れ、カラシ入れなど、それまで有田の陶工たちが知らなかったような形状のものもあった。欧州からの要望が増えるにつれ、新しい色や様式が有田の職人によって生み出された。

17 世紀後半、有田焼の中でも特に重要な様式のひとつであったのが、柿右衛門（かきえもん）様式の磁器である。上絵の色とデザインが特徴で、ドイツのマイセン磁器の窯元など欧州の陶磁器生産者に影響を与えた。18 世紀前半には、金襴手（きんらんて）とよばれる別の様式も欧州の上流階級で人気を博した。この金襴手様式は、金彩を用いて豪華で色彩に富んだデザインを作り上げた中国の古代様式の影響を受けている。

1680 年代には清朝が中国全土を支配し、平和な時代が始まった。それに伴い、中国からの輸出が再開したため、有田焼は突如競争にさらされることになった。1757 年には、オランダ東インド会社が有田焼の輸出を正式に中止した。それから約 100 年後、日本が外国との貿易を再開すると、多くの貿易商たちは有田焼を海外で再び販売し始めた。西洋との貿易によって、海外ですでに発達していた新しい技術も流入してきた。欧州の職人は、東洋の磁器を模倣しようとする中で、石膏型を設計し、新しい顔料を発見し、新しい種類の窯を作り上げてきたのである。日本の職人もこれらの先進技術を自らの作品にいち早く採り入れた。

明治（めいじ）時代（1868～1912）、日本政府は、国の経済活性化の一環として、絹や磁器などの伝統製品の輸出を促進した。特に、1873 年のウィーン、1876 年のフィラデルフィア、1878 年のパリなどのいくつかの万国博覧会で、有田焼などの工芸品の輸出振興を後押しした。